

コンサベーション・インターナショナル (CI)/Environment Defense Fund
Natural Resources Defense Council /レインフォレスト・アライアンス
ザ・ネイチャー・コンサーバンス (TNC) / Union of Concerned Scientists
ワイルドライフ・コンサベーション・ソサエティ/ウッズ・ホール・リサーチ・センター

REDD+と生態学的コベネフィッツ

2010年3月

我々は気候変動を緩和するための確固とした REDD+¹メカニズムに、森林生態系の完全性と持続可能性、および人類の幸福の実現に必要な、生態学的コベネフィッツの保全や向上を取り入れることを提案します。

国際的な気候変動緩和戦略において、地球上の熱帯林は重要な要素となっています。しかしながら、森林減少・劣化を低減するメリットは、炭素の増減に関わる影響のみにとどまりません。熱帯林は炭素の吸収源であるだけでなく、地球上の多様な種の半分以上の陸域・水域の生息環境を有しています。しかしながら、生物多様性は生態系の回復力の指標のひとつに過ぎず、それ故、REDD+を実施する際は、幅広く熱帯林が有する様々なサービスを保全することが重要なのです。熱帯林は水循環や水質浄化、一定の地域内における気候調整、土壌や生物地球化学的な循環プロセスなど、重要な生態系のシステムを維持しているのです²。こうした生態系システムのコベネフィッツは、REDD+のメカニズムが保全と強化を促進するように設計されない限り、実現されません。REDD+の政策は、主要な水域、生息地、気候機能が維持されるよう、国家／地域の実施計画と平行して、策定されるべきです。

現在、コペンハーゲンでの UNFCCC AWG-LCA 第8回会合の文書では、REDD+が原生林の保全と保護と、原生林における生態系サービスを守ることにインセンティブを与えるセーフガードを含んでいます。このセーフガードは重要で、交渉文書の中には堅持されなければならない、さらに重要な生態系サービスとして、水域、生息地、気候機能が言及されるべきです。これらのセーフガードは、森林被覆／炭素のモニタリングと同時にこれらの機能をモニタリングすることが可能な指標に関するガイダンスとともに運用することが推奨されます。

REDD+がうまく機能するには、排出を減らし、削減を増やし、森林の炭素の吸収源の維持をするた

¹我々は、森林減少と森林劣化による排出量の削減 (REDD) に加え、厳格な環境、社会的基準と確固たる炭素測定に基づく原生林の持続可能な管理、原生林の保護と森林被覆が高く劣化率が低い地域を含む炭素吸収の維持、劣化している森林の回復・改善を通じた炭素吸収の促進、環境的に適切な植林と再植林を通して森林被覆を増やすことを含めたメカニズムを支持します。

² Stickler et al. 2009. The potential ecological costs and cobenefits of REDD: a critical review and case study from the Amazon region. *Global Change Biology*(15) 2803-2824

めの確固とした計測方法を基礎とする必要があります。しかしながら、この枠組みのもとだけでは、生態学的に貴重な森林のある草原や低木地域のように、吸収量の低い自然生態系が産業林のように吸収量の高い森林に転換させるためのインセンティブが働いてしまうかもしれません。よって、コペンハーゲンの AWG-LCA の報告に含まれている原生林に対する保護策は、自然で、開発されていない非森林生態系にも適用されるべきです。

開発されていない原生林の吸収量を守ることにインセンティブを与えることは、農業活動が、原生サバンナ、草地、高木林地など炭素吸収量の低い場所へ移転するという、思わぬ結果を生み出すかもしれません。これらの非森林生態系の保全による炭素吸収量は、低いものの、それらが提供する生態系サービスは人類の福祉にとって重要であり、また現地固有種の生息地維持、流域の健全性の保持、土壌の保全など、景観レベルにおける生態系機能として極めて重要です。それゆえに、REDD+の取り組みは森林だけに注目するのではなく、生態学的に価値のある非森林生態系を維持するための統合的な土地利用計画のもとで実施されるべきです。

REDD+の取り組みは、その他の生態系サービスを守り、向上させるために重要な役割を果たすため、生態系機能と景観の維持に貢献することが可能です。たとえわずかな炭素の目標値へのインセンティブであっても、生態系とそれらに依存して暮らす人々に対して、甚大な生態学的な利益をもたらすことができます。たとえば、水辺の森林環境を保全し、回復するインセンティブを設けた場合、森林による炭素吸収という便益に加え、景観的に連続した水域の生態系保護につながる可能性があります。国際的な REDD+メカニズムでは、確固としたモニタリング・報告・実証に基づく評価により生態学的コベネフィッツを幅広く保護・維持していくことを考慮し、設定するべきです。こうしたコベネフィッツの多くは追加的なデータを使い、炭素吸収の評価に使われるものと同一、あるいは同様のモニタリング方法、技術、頻度によって、モニタリングすることが可能です。³

さらに、我々は各締約国に対して、REDD+の枠組みにおいて生態学的コベネフィッツを検討する際は、生物多様性への配慮に限らず、以下を満たすべきであることを強調します：

- 京都議定書⁴の下にある土地利用、土地利用転換、森林経済に現在使われているような、望ましくない結果を導くことがないように、REDD+の定義上に抜け穴を作らないようにする。
- すべての途上国による幅広い参加を可能とする。
- 森林劣化と減少の危機にある熱帯林を含む
- 特に生物多様性が豊かである保護地域や、生態学的にも保護の優先順位の高い地域の管理や

³Stickler et al. 2009. The potential ecological costs and cobenefits of REDD:a critical review and case study from the Amazon region. *Global Change Biology*(15)2803-2824

⁴現在 LULUCF ルールにある抜け穴には、原生林、自然林と産業林の区別が定義されていないことと、アカウントされる取り組みを締約国が個別に選択できることである。

保護の実施を促進するような取り組みへのインセンティブを含むように設計するべきである。

5

- 前述した個々の生態学的コベネフィッツを評価するための **MRV** アプローチ (生物多様性のための生息環境、流域機能、地域レベルでの気候プロセス、土壌循環や生物地球化学的プロセス) を開発し、地域的あるいは景観規模での統合的な計画を可能とし、
- 炭素だけではなく、生態学的コベネフィッツに関しても、そのモニタリング、報告アプローチ、枠組みの開発と管理のために適切な財源を提供する

⁵多くの保護された地域は法的に守られているのにもかかわらず、森林の劣化と減少を経験し続けているが、追加的な財源があれば効果的に保護されるだろう。